

第3章：ニセコ地域における観光の現況

1 過去の観光発展段階

ニセコ地域における観光について発展の経緯を詳細に記述するにはページ数の制約から無理があるので、ここでは成澤の論文(2003)から引用を行うこととする。詳細については巻末資料の「ニセコ地域関連年表」を参照願いたい。

同論文をもとに、ニセコ地域の観光発展史(倶知安町とニセコ町を中心とする)を分析すると次の5段階に分けられよう。

① 第1期(初期開拓期、入植期～1910年頃)

1890年代から入植が開始され、北海道鉄道や国道5号線が開通し発展の基礎が築かれた時期。この間に開拓が進むとともに各地で温泉の開発・開業が行われた。

② 第2期(スキーリゾート揺籃期、1910年頃～1962年頃)

レルヒ少佐によってスキー技術が伝播(1912年)され、ニセコアン(現ひらふ)スキー場が開設(1923年)、1928年には秩父宮がニセコでスキー登山を行って知名度が向上した。

③ 第3期(スキーリゾート確立期、1962年頃～1980年頃)

日本最大級のリフトが設置され、1962年に国体のスキー会場となって地位が確立、高度成長期とも重なって地上交通や航空便の充実化で観光事業に活発な投資が行われた。

④ 第4期(通年型リゾート転換期、1980年頃～2000年頃)

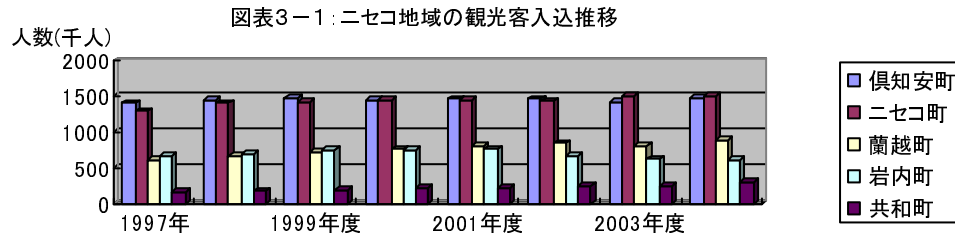
1980年代初頭からペンション開業ブームが到来、バブル経済等の影響で本州の大手企業による観光事業への進出が本格化した。また地域に住み付いたオーストラリア人によりラフティング等の夏季親水スポーツ事業が成功した結果、夏季観光需要が大きく伸長した。

⑤ 第5期(グローバル化初期、2000年頃～現在に至る)

ニセコ地域の雪質の素晴らしさが口コミでオーストラリア人スキーヤーに伝達され、冬季スキー滞在客が急速に増加してきた。それと並行して、好調な豪州国内景気を背景に不動産ビジネスの優位性に着目した事業家層が不動産開発事業への進出を開始し、ニセコ地域が観光と不動産の両面でグローバル化の洗礼を受け始めているのが現状である。

2 観光客の入込み状況

2章でみたとおり、1997(平成9)年度から2004(平成16)年度までの8年間、北海道全体の観光客入込み状況は横ばい状況が続いている。さらにニセコ地域に焦点をあてると、観光客の入込推移は図表3-1のとおりで、やはり横ばい状況が続いているといえ、2004年度では入込総数478.6万人(宿泊率24.1%、宿泊客延数145.8万人)の規模となっている。



3 外国人観光客の状況

北海道を訪問する外国人は台湾・香港・韓国など東アジア諸国を中心として増加傾向を示しており、2章で概観したように最近8年間(1997~2004)では12.1万人から42.7万人へと約3.5倍に拡大した。このうち台湾人観光客は20.8万人(48.8%)で約半数を占め、本報告書の注目するオーストラリア人は3,300人から14,650人と急増している。

台湾から北海道への観光客訪来が顕著になってきたのはもちろん偶然ではない。平田(2000)の論文でも指摘されているように、日本側からは観光業界(宿泊・旅行・航空等の業界)や行政・各観光連盟などによる粘り強い誘致計画が奏功し、また台湾側からも各業界等関係者の地道な努力があった。

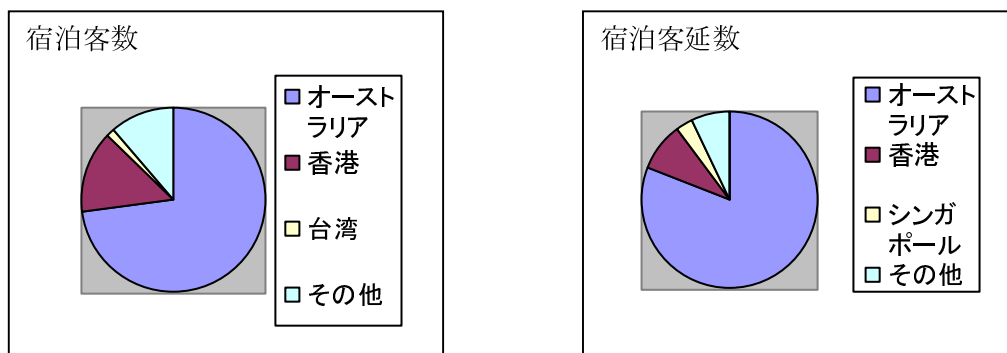
一方ニセコ地域に目を向けると、ここでは倶知安・ニセコ・蘭越の3町が「東アジア観光客誘致協議会」を組織して台湾を主要ターゲットとして観光ミッションを派遣するなどの活動を行ってきた。

ニセコ地域4町全体の外国人訪問客(宿泊人数)は、2004年度で1.9万人(宿泊客延数6.9万人)である。(共和町は無視できる人数で、統計が出ていない) 国籍別宿泊者数ではオーストラリア(5,119人、全体の27%)、韓国(4,274人)、台湾(2,567人)の順となっている。町別の内訳では、倶知安町が0.58万人(宿泊客延数5.53万人)、ニセコ町が1.29万人(宿泊客延数1.38万人)である。

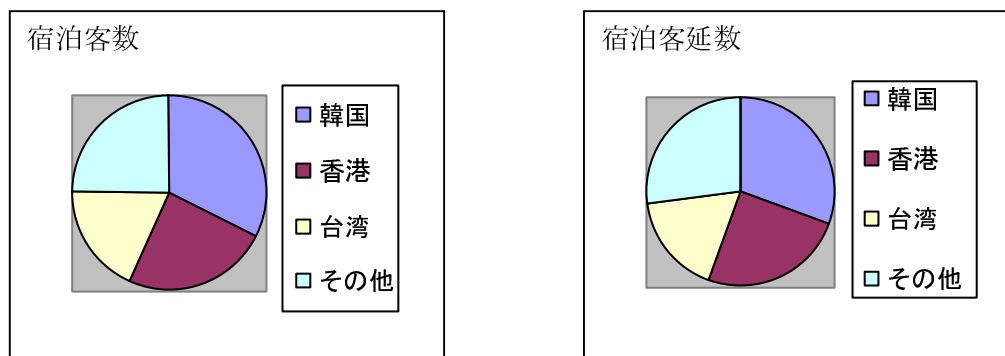
この2町を国籍別に分析すると、2004年度の宿泊客数と宿泊客延数は下図となり、興味深い対比が観察される。

図表3-2: 倶知安町とニセコ町における外国人宿泊者数の国籍別構成

① (倶知安町) 宿泊客数 5,783人 / 宿泊客延数 55,320人(平均9.6泊/人)

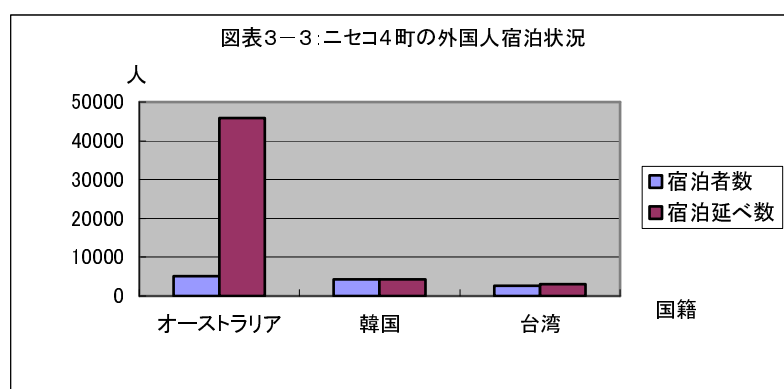


② (ニセコ町) 宿泊客数 12,947 人／宿泊客延数 13,833 人(平均 1.1 泊/人)



さらに詳細な数字を分析した結果、次のような事実が判明した。

- ・倶知安町で宿泊する外国人はニセコ町の約 1/2 であるが、宿泊客延数は約 4 倍である。
- ・倶知安町で宿泊する外国人の大半はオーストラリア人で、平均して 10.7 泊/人である。
- ・ニセコ町で宿泊する外国人の大半は台湾・韓国・香港人で、平均 1.0 泊/人である。
- ・来訪時期を季節別でみると、台湾・韓国・香港人はほぼ上期(夏シーズン)と下期(冬シーズン)に大きな差がない(それぞれ、台湾＝上期 38%/下期 62%、韓国＝上期 76%/下期 24%、香港＝上期 46%/下期 54%)のに対して、オーストラリア人は上期 8%/下期 92%で圧倒的に下期の訪問に偏在している。
- ・つまり、本報告書の主対象とするオーストラリア人観光客はスキーシーズンにだけニセコにやって来て、他のアジア系外国人と比較して長期間の滞在を行っている、と言っても過言ではない。(下記図表 3-3 を参照) 事実、今回の聞き取り調査においてニセコで事業を展開しているオーストラリア人事業家達は「冬場のスキー場を除くと、それ以外の季節に大きな魅力はニセコにない」と述べている。



4 観光関連事業の現状

観光関連事業は裾野が広いが、ニセコ地域において中核となるのは各種体験事業(アウトドア及びインドア)であり、周辺事業として旅行業・宿泊業(温泉旅館も含む)・飲食業・土産物業・運輸業、さらには一般商店などの生活関連事業が展開されている。

(1) 体験事業(アウトドア・スポーツ及びインドア・スポーツ等)

ニセコという山岳リゾートにおける体験事業は、豪雪地帯という特性から、冬季とそれ以外の季節では大きく異なる。

① 冬季(スノー・シーズンは例年11月末頃～4月頃)のアウトドア・スポーツ等

天賦の豪雪を活かしたスキー(スノーボード)・リゾート地帯であり、地域の観光プロモーション誌「ニセコエクスプレス」vol.19の表現によると、「極上のパウダースノー、破格の広さ、多彩なコース、雄大な景色」と謳われている。

ニセコ地域には、ニセコ連峰を取り囲むように合計7ヶ所のスキー場が設置、運営されており、概要は次のとおりである。(なおニセコ連峰の南部に位置し同地域の最高峰である羊蹄山(1898m)は、登山・ハイキングの対象になっている山ではあるが、スキー場は設置されていない。)

図表3-4：ニセコ地域のスキー場一覧

no	スキー場名	索道(リフト等)事業主体	リフト	周辺宿泊施設
1	ニセコワイス	ニセコワイス観光(株) 等	3本(620～760m)	17軒
2	グラン・ヒラフ	日本ハーモニーリゾート(株)および東急不動産(株)	20本(526～1878m)	約130軒
3	ニセコ東山	(株)コクド	8本(427～2660m)	26軒
4	ニセコアンヌプリ	中央バス観光商事(株)	8本(500～2273m)	30軒
5	ラ・ポンテ(モイ)	(株)太閤	2本(919～1574m)	17軒
6	ニセコチセヌプリ	蘭越町	1本(1169m)	18軒
7	ニセコいわない	(株)ニセコウエストバレー	1本(704m)	22軒

上記のグラン・ヒラフスキー場(もともとは別個の3社が、それぞれ「ニセコひらふアルペン」「ニセコひらふ高原」「ニセコひらふ花園」として経営してきた)は昨年5月に東急不動産が3スキー場を一社で所有する形になったが、このうち花園スキー場を昨年11月に豪州系資本の日本ハーモニーリゾート(株)に売却した。ただし、両社の営業方針により3スキー場を「ニセコ・グランヒラフ」として名称を統合してマーケティング活動を展開している。

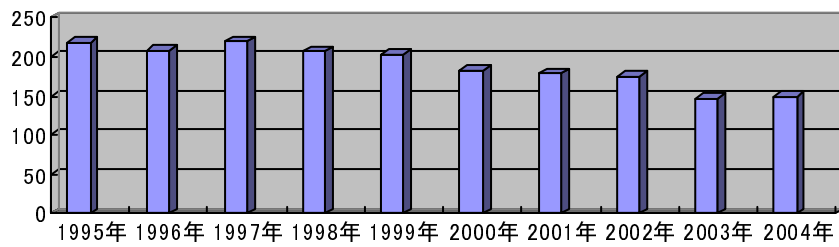
また、上記2～4の3スキー場(グラン・ヒラフ、ニセコ東山、ニセコアンヌプリ)は山頂部分がニセコアンヌプリ(1308m)で共通しており、「The NISEKO United」という名称で全山共通券を発行して相互利用を図っており、各スキー場の全リフト、および山麓を結ぶ連絡バスをこの共通券で利用することができる。

このほか、ニセコ地域では冬季のアウトドア・スポーツには次のような種目が利用可能である。

「スキー・スノーボード・スノーシュー・スノーモービル・スノーラフティング・かまくらキャンプ・パラセーリング・イグルー作り・雪中野菜狩り、等。」

ところで、ニセコ地域の各スキー場利用者数は下図のような推移を辿っており、全国スキー場の長期逡減傾向と一致している。

図表 3-5 : ニセコ地域のスキー場利用者数一覧(単位 : 万人)



(注)出典 : 北海道運輸局鉄道部

資料提供はニセコ地域の各スキー場による索道利用者数の報告から北海道運輸局が利用者数を推定したものである。ただし、この中に加森観光(株)が運営するルスツ・リゾートと中山峠の数値も含まれているため当報告書の対象とするニセコ地域各スキー場だけの純粋な数値とはなっていない。(事業者別のデータは得ることができなかった)

② 冬季外の季節(春～秋)のアウトドア・スポーツ等

次に、冬季以外のアウトドア・スポーツには次のような種目が利用可能である。
「親水スポーツ(川・海でのカヌー・カヤック・ラフティング等)・スカイスports(熱気球・パラグライダー等)・陸上スポーツ(ゴルフ・パークゴルフ・乗馬・登山・ハイキング・マウンテンバイク・テニス・キャンプ・オートキャンプ・モータースポーツ等)、等。」

春～秋季の主要陸上スポーツの一つであるゴルフについては、図表 3-6 のとおり 4 施設がある。ただし、「ニセコ東急ゴルフコース」については 1992 年に東急不動産が開発、営業していたが、今年 5 月に花園スキー場に続いて豪州系資本の日本ハーモニーリゾート(株)に売却した上で、同社から賃借する形で営業を継続している。

図表 3-6 : ニセコ地域のゴルフ場一覧

No	ゴルフ場名	経営主体	営業開始	概要
1	ニセコゴルフ&リゾート (蘭越町)	国武(株)	1974年	18ホール/par72
2	ニセコゴルフコース(ニセコ町)	(株)コクド	1986年	18ホール/par72
3	ニセコ東山プリンスホテルゴルフコース(ニセコ町)	(株)コクド	1992年	プリンスコース : 18ホール/par73 東山コース : 18ホール/par70
4	ニセコ東急ゴルフコース(倶知安町)	日本ハーモニーリゾート(株)	1992年	18ホール/par72

③ 通年ベースで行えるインドア体験

通年で体験可能なインドア体験として次のような種目が利用可能であり、修学旅行生などに人気がある。

「陶芸・ガラス工芸・クラフト・そば打ち・燻製やジャムなどの食品づくり、等。」

(2) 周辺の事業(旅行業・宿泊業・飲食業など)

周辺の事業は幅広いが、ここでは外国人観光客と接触の多い業種に限定して旅行業・宿泊業・飲食業などに限定して記述する。

① 旅行業

倶知安町には旅行業者が2社あるが、いずれも国内旅行だけを主要営業品目とする第2種旅行業者¹であり、オーストラリア人観光客はほとんど顧客対象となっていない。

また、新しい動きとしてオーストラリア人の経営する旅行業者も活動しているが、それについては次章で詳述する。

また、ニセコ町では2003年に法人化した(株)ニセコリゾート観光協会(第2種)も営業活動を行っているが、同様に営業上でオーストラリア人との関係は薄い。

② 宿泊業

ニセコ地域の宿泊業界は大きく分けて4つの流れがある。一つは明治時代から徐々に開業が始まった温泉旅館の系統である。二つ目はスキーの普及とスキー場の営業開始に伴い少しずつ農家などがスキー宿として冬の業を営んできた流れである。三つ目は1970年代以降に流行したペンション・ブームに伴うペンション営業展開の系統である。四つ目は道外資本の参入であり、本州の電鉄系と航空系に分かれる。

このようにして、図表3-4のスキー場一覧で明らかにしたとおり、当地域の宿泊業者は各スキー場を中心に260軒もの宿泊施設を有する一大業界を成している。

ただし、全体的に中小規模の施設が多いのが特徴で、100室以上の比較的大規模な施設としてはニセコ東山プリンスホテル(新館506室/本館200室)、ニセコプリンスホテルひらふ亭(165室)、ホテル日航アンスプリ(155室)、ホテルニセコスコット(142室)、ホテルニセコアルペン(130室)、の5館だけである。

ニセコ地域の温泉旅館は1884年(明治17年)の昆布温泉開湯に端を発しており、現在は地域の各地に小規模の温泉郷が点在する道内でも有数の温泉地帯に発展し、温泉を引く旅館・ホテルが数多く営業を行っている。

また、旅行業と同様にオーストラリア人の経営する宿泊施設(コンドミニウム/condominiumと呼ばれる分譲マンションが主体である)が新規の建設ブームを起こして注目を浴びており、詳細は次章で述べる。

¹ 「第2種旅行業者」とは、海外募集型企画旅行は取扱いできないが、それ以外は国内旅行の企画・実施や手配旅行の取扱いなどが営業可能であると旅行業法で定められた旅行業者であり、都道府県知事への登録が義務付けられている。

③ 飲食業

「ニセコエクスプレス」vol.19によれば、飲食店は倶知安町に123軒(うち、ひらふ地区には22%にあたる27軒)、ニセコ町に44軒が営業を行っている。なお英語版「NISEKO express」には「グルメガイド」として倶知安町に11軒、ニセコ町に27軒の飲食店が紹介されている。冬季にオーストラリア人スキー客が大挙して来訪する時期は、ひらふスキー場周辺の飲食店が不足気味で混雑するため冬季の課題の一つとなっている。

④ その他の事業

- ・短期・長期を問わず、観光客には買い物が重要事項の一つである。しかし外国人の集まるスキー場周辺にはひらふスキー場の近くにコンビニエンスストアが1軒あるだけで、他のスキー場にはそれすらもない状態である。ひらふ地区からは空き時間にバス等を利用して倶知安地王中心部のスーパー(マックスバリュ等)に買出しに出かけている。
- ・次に関連事業とはいえないが、病人が発生した場合の医療体制も重要である。ひらふ地区ではK病院を紹介しているが必ずしも十分とは言えないようである。(病院内でも英会話教室を開いているが、細かい症状説明などの場面では意思疎通が完璧にはいかないので通訳の存在が欠かせない模様である)
- ・またスキー場周辺には交番がない。今のところ事件性のあるトラブルは発生していないようであるが、心細い状態が続いているようである。



(写真提供：(有)北海道トラックス)

<参考文献>

成澤義親 (2003) 「アウトドア活動の事業家過程—ニセコにおけるラフティング事業を例として」『日本国際観光学会論文集』第10号

ニセコ山系観光連絡協議会 (2004) 『ニセコ エクスプレス』vol.19

平田真幸 (2000) 「台湾からの『北海道ブーム』はどのように生まれたか?—デスティネーション・マーケティングからの考察—」『観光に関する学術論文』(財)アジア太平洋観光交流センター

北海道経済部観光の町づくり推進室(2005)「北海道観光入込数調査報告書—平成16年度」

北海道索道協会 (2004) 「索道施設設備要覧」

その他、北海道運輸局鉄道部作成資料、倶知安町作成資料